

# おじいちゃんのくつや

レイ・ゴールドラップ

ほんとうにあったお話をもとに書かれました

「『ごめんなさい』と言うのはむずかしいときもあります」  
(Children's Songbook, 98)

ミゲルは、おじいちゃんがやっているくつやのドアを開けました。おじいちゃんがくつを作るのに使っていた、皮のおいをかぎました。それはミゲルの大好きなおいでした。

「こんにちは、おじいちゃん！」

おじいちゃんはひざまずいて、お客さんの足の形を紙に写していました。おじいちゃんは顔を上げませんでした。耳が遠いのです。

ミゲルは、仕事用のベンチにすわりました。切った皮が積んであるのを見ました。トンカチやベンチを使ってこの1枚1枚の皮からどんなくつを作るのだろうと想像しました。

道具を見て、ミゲルは好きな物をおい出しました。おじいちゃんは、ミゲルがそうじを手伝うたびに、キャンディーをくれたのです。

でも、ミゲルは今、おなかがすいていました！おじいちゃんに聞かずに、自分でお菓子を取るのにはよくないと知っていましたが、見るとおじいちゃんはしばらくそがしそうです。「待たなくてもいいんじゃないかな」とミゲルは思いました。

ミゲルはカウンターの下にある、キャンディーの入ったびんに手をのばしました。その中には、あまいのとか、チリパウダーのついたからいとか、ミゲルの大好きなキャンディーがたくさん入っていました。びんのふたを開けたとき、ちょっといやな気持ちになりました。でも、キャンディーはすごくおいしそうに見えました。ミゲルは急いで口の中に入れました。

間もなく、お客さんが帰りました。おじいちゃんは1枚の皮を取ると、水にひたしました。そうすることで、皮がやわらかくなり、あつかいやすくなるのです。

「いいかい、わたしたちはもっとこのくつのようにならないといけないんだよ」とおじいちゃんと言いました。

ミゲルはできるだけ急いで、残りのキャンディーを飲みこみました。それから、おじいちゃんの所に歩いて行きました。

「こんにちは！」おじいちゃんはニコニコしながら、「会いに来てくれてうれしいよ」と答えました。

ミゲルはおじいちゃんをだきしめました。キャンディーを食べたことが、おじいちゃんにばれないといいなと思いました。ミゲルは心配をはらいのけました。

「今日はいそがしそうですね」と言って、ミゲルはたくさん積まれた皮を指さしました。「手伝えることはある？」

「もちろんさ！」「糸を取ってくれるかい？」

ミゲルは長い糸に手をのばしました。両手で引っ張ってみると、見た目よりもしっかりしていました。

「わあ、すごく強いね。」

おじいちゃんは、楽しそうに笑いながら、「そりゃあ、強くないといけないんだよ。一生長持ちするようにね」と言って、おじいちゃんは糸を皮に通しました。それから、お母さんが時々「かしこいおじいちゃん」とよんでいる顔になりました。

「いいかい。わたしたちはもっと、このくつのような必要があるんだよ。」おじいちゃんがうなずきながら言いました。

ミゲルは皮をちらっと横目で見ました。「えっと。そうなの？」

「そうだよ。強くなければいけないんだ。そうすれば、サタンのゆうわくにも負けずにいられるんだよ。」

ミゲルの頭に、赤いキャンディーが思いうかびました。おじいちゃんに話した方がいいと分かりました。

おじいちゃんは、たなから古いくつを片方取り出しました。「この大きなあなを見てごらん。」

ミゲルの手がすっぽり入ってしまうほど大きなあなでした。「うん。」

「このあなは、前は小さくて簡単に直せるくらいだったが、そのままほうっておいたから、直すのはもっとむずかしくなっちゃったんだよ。悪い習慣や悪い選びは、このあなにしているんだよ。早くに直した方がいいのさ。」



おじいちゃんはもう一度うなずくと、またいつもの笑顔にもどりました。二人でおしゃべりしながら、おじいちゃんは仕事を続けました。その間ずっとミゲルは赤いキャンディーのことを考えていました。

おじいちゃんの仕事が終わりに、ミゲルは片付けを手伝いました。その後、おじいちゃんはキャンディーのびんに手をのばしました。

ついに、ミゲルはがまんでできなくなりました。「キャンディーを1つ取っちゃったんだ！」ミゲルは大きな声で言いました。

おじいちゃんはびんを置きました。「どういことだい？」

ミゲルは、だまってキャンディーを取ってしまったことをおじいちゃんに話しました。「ごめんなさい。おじいちゃん！もう二度としません。約束します！」

おじいちゃんはミゲルをギュッとだきしめました。ミゲルは、すごく気分が良くなりました。

「正直に言ってくれてありがとう。それは、わたしにとって何よりも大切だよ。」

家に向かって歩きながら、ミゲルは自分が、おじいちゃんの作った新しいくつになったように感じました。とても強く、生きる力にあふれている感じがしました！ ■

このお話を書いた人は、アメリカ合衆国ユタ州に住んでいます。

## すばらしい気持ち



ある日、お母さんとわたしの水の料金をはらいにいったとき、わたしたちの前にはいた男の人が、たくさんのお金を落として、気づかずに行ってしまいました。わたしは急いで追いかけて、お金をわたしました。男の人は、「どうもありがとう」と言って、ほかの子はそんなことはしないだろうと言いました。その後、とても良い気持ちになりました。いつもその良い気持ちを覚えていようと思います。

ブリアナ・C、9才 (アメリカ合衆国、アイダホ州)

